詩誌
回生
き号

目　次

【詩】百の答えと　一つの問い　中村正秋　4
【詩】ある日のアルビノ　やまうちあつし　6
【詩】生存手品　秋網まさお　8
【詩】夢のほとり　金子忠政　10
【詩】戯・恋唄X　金子忠政　12

情報短信（From Koguma）　14

【詩】一番星　青島江里　27
【詩】わたしが棄てた女　前澤ひとみ　30
【詩】首の痛みについて　小熊昭広　32

ランダム・メモリー

表紙画　明才
URL：*http://tsurumakidou.xxxxxxxx.jp*

百の答えと　一つの問い

中村　正秋

答えが先にある問いも　あるのかもしれない
たとえば　家から外に出て　寒い風にあたりながら
考えた答えは　暖かい飲み物
それから　家の中に入り　ストーブの前に座り
しばらくすると　考えた答えは　冷たい炭酸飲料
答えは変化して　留まることがなく
忘れ去られるが　ふと　また現れる

忘れ去られた答えが　折り重なって
消されていく　答えもある

答えは多く存在し　すべてが正しいかはわからないし
思いもよらないことになる可能性だってある
存在自体が一つの答えとすれば
その多様性は一つの問いを発する
しかし　多様性ゆえに　答えが無数に生み出され
そのために　これという答えが出されないまま
時間と空間が　移動して　最大値をとることになる
答えが多いために　あたかも　一つの問いから
導き出されたとは思えないが　確かに　問いは一つで
命の数だけ　答えがある

時々　思い出してみるのもよいかもしれない
消え去った多くの答えと　一つの問いを

ある日のアルビノ

やまうちあつし

とある白夜に
白い車で
消失点を探しに出かける
君は白いコート
僕は白いスーツ
サングラスだけ真っ黒い
カラスのアルビノ
不吉なことばかり話そう
どうせいつかは世界が終わる
美しい嘘しかつくな
嘴が凍るよ

何かの末裔だという自負は
まだ消えたわけじゃない
ことばをあべこべに
こころをさかさまに
真実はおりたたみ
軽蔑をおりまぜて
信じられない格好で
信じられるかの審判を
口で
口だけで約束して
さもなくば
魂が凍るよ
続きは生まれ変わってからだ

生存手品

秋網まさお

鋼の波動
しゅうれんする意志
浮く　沈む
（引力の仕業を知っているだろうか）
まるで傾げたマッチ棒
計りしれない諾否
は不問の点火
ケロイドの彷徨

夕暮れに
にじむ
しもた屋まじりの
しょうてんがい劇場の
くたびれた紅白と鯨幕の
片隅で
人いきれの

方角へ
シューフィッターが
跛行を履かせ
猫だましをする

「ムーラン・ド・ギャレット」※をわたる斜光のくぐもり
精悍な幹元へ苦笑いを滴らせている樹木
なぜだ
罪深い能書きの金縛り
身の程は濁っている

かいなを伝う風の歩調が
不在をたどり
陰影を吹き込む
値踏みのとき
わずか背丈ほどの
かみ切れない残響が
山の端を越えてゆく

※A・ルノワールの油彩画

夢のほとり

金子忠政

しだいに怒り狂い
みなぎる闇の影に潤うことはない

うねっている
車窓に濃緑の海が広がっている
向かい側の席
母に抱かれ
祈りのような眠りから覚めた幼子が
突き通す澄んだ眼で

じっと見つめてくる
たじろぐ
透視される
息が詰まる
まだ見ている
眼をそらそうとした瞬間
にこっと笑った
影はおずおずしりぞき
ほのかに白く
そこだけ淡く明るくなった

私に、夢のほとり、

戯・恋唄X

金子忠政

腿のまわりに
集まってくる
雷鳴のひとしずく、ふたしずく……

ひらかれる膝が
軽はずみな私を
微笑んで諭している

おくれ毛がしろい首筋にからまり
もつれている
あおざめた血管が
ふたすじ浮かびあがる
うすい皮膚

あおじろい鎖骨

そして、どこからはじまるかわからないかぐわしい体臭

あっさり蹂躙され
蹂躙することにおののき
それゆえ、すべからく
脊髄のあたりに配置される

幻灯のようにゆらいで
くちびるが何かささやいている
いや、
拒絶している
ああ、音のない深い淵
不在の理に苦しみ楽しみ
老いさらばえ
盲目へと強いられ
口元を歪ませて閉ざす

むしゃくしゃする

情報短信（from Koguma）

▼2015.12.26　カフェ・モーツアルト・アトリエで詩誌の最終校正、結局、終わらず。

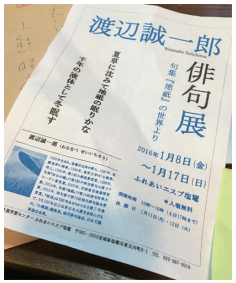
▼2015.12.28　父方の伯母逝去。年越しとなる。

▼2016.01.01　河原でマルの散歩。年末に届いた活字の整理が終わる。正月らしいこと、なに一つ無し。

▼2016.01.05　読書会の案内状を活版で印刷してみる。終日掛かる。翌日発送。

▼2016.01.09　読書会。今回の企画（「～若者に希望ある社会に向けて、先進事例に学ぶ～「不登校、高校中退者の自立、そして子どもの貧困を考えるシンポジウム」）と詩の関係はあまりない。この企画は、自分の中で、意識的に、社会に関わるということなのだが。極力、詩に対して自分の存在価値を見出すことには無関心でいようと思う。結果として、私が書く詩のようなものの形の中に表れてくることはあっても。

▼2016.01.15　友と飲酒。彼が、今日、山形のジャズ喫茶「オクテット」に行ってきた話を聞く。ズート・シムズの山形公演の時、メンバーの中にバッキー・ピザレリがいたとは驚き、聴きたかったと思う。

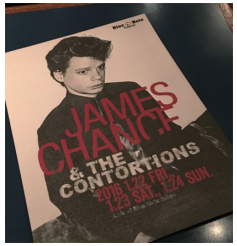


▼2016.01.17　塩釜のエスプで渡辺誠一郎氏の俳句展。字が素敵。処女句集に惹かれる。

▼2016.01.22　東京へ。東京オペラシティ・アートギャラリーで金子拓展。売店で、ノイズ楽器購入、散財。次、佐々木活字店、着いたら眼鏡を道に落としていたことが判明、焦りながらも約一時間店主（ではなく、塚田さん）と雑話。足らない活字を買い求める（花形活字も少々）。変な道具を手に入れたのでその用途を尋ねると、罫線を切る機械（ケイキリ）とのこと。ただし、ただの罫切りではなく、四角の枠をつくるための四十五度に罫線を切る特殊なもの。試し用に、罫線をいただく。帰路、道に眼鏡が落ちていた。

▼印刷博物館、午後三時からの活版印刷体験に参加。まず、文選のときの文選箱の持ち方を知る。次に、活字は指の腹で優しく持つことを知る。次に、活字の文選箱への並べ方を知る。文選職人は、文庫本一ページの文字を拾うのに約一時間の仕事だったとのこと。次、ADANA 8×5で便箋への名前の印刷作業。整備され、調整されたアダナの手フートの印刷のイメージが理解できた。さらに、インク載せは二回ローラーを動かしてインクを活字に乗せ、三回目に印刷するとのこと。ストッパーの調整が自分の機械では必要だと痛感する。とにかく力をレバーに入れなくても、軽くカチッっと倒すだけで綺麗に印字できる。紙を載せる面には厚紙を充てているとのこと。とにかく、目から鱗だった。

▼南青山で、リ・ウーハンの銅版画。しばしウーハン談議。



▼午後六時四五分、ブルーノート東京に入る。赤ワインと簡単な料理。最後はアイリッシュウィスキー。マイケル・チャンスは最高に面白かった。ほとんど、笑って聴いていた。

▼2016.01.23　青森のジャズ喫茶「disk」へ。アマチュアのバンドの生演奏を聴く。テナーとベースがよかった。

▼2016.01.24　金子拓展 project N 63（於：2016年東京オペラシティアートギャラリー）に行く。

詩詩『回生』として継続開催している「無意味な意味の尾形亀之助読書会」の良き理解者であり、協力者である金子忠政氏のご子息金子拓さんの個展を東京オペラシティ・アートギャラリーで見てきました。私にとって、金子拓さんの父である金子忠政氏については、ここ数年の間で量的にも、読み込む集中度においても、最も多く、そして高く接している詩人です。そのことは、私なりの理解が強固に確立している詩人であるということが言えます。それ故に、私にとっては、金子拓さんの絵画作品群を見るに当たって、この歪な距離がまず、気になりました。そして、なるべく先入観を振り払って見ることに集中したつもりでした。しかし、それは所詮、無理なことだと、見終わってしまった今、思っています。

先入観を持たなければならなかったということを、もっと具体的な過程として、くどくなりますが、まず書かせていただきます。それは、この東京オペラシティアートギャラリーのプロジェクトNという金子拓さんの展覧会は、東京オペラシティアートギャラリーと縁がある故難波田龍起氏の意志を引き継ぎ、若手の育成・支援を目的として開催されている展覧会シリーズです。ですから、この六十三回目となるプロジェクトNにどうして金子拓さんの一連の絵画が選ばれたのか、美術館としては説明する必要を義務として感じているようです。その現れとして、この展覧会の会場に置かれているパンフレット、あるいはホームページでの展覧会の案内ページにおいて、東京オペラシティ・アートギャラリーのチーフキュレーターの堀元彰氏が「現代の黙示録ー金子拓の絵画」として、金子拓さんの絵画のかなり詳細な説明文を掲載されています。画家にとっては、このように視覚物について、受け取った感想を文章という人の思考で書かれることは、それが的を得ていない意外なことであっても、とてもありがたいことではないかと思います。そして、私は、その文章を読んで、父の金子忠政氏の詩の作品群との類似性を感じてしまったということです。

絵を見る前に、そんな経過を辿って、一月二二日に新宿から、複雑な構造（単に初台へ行くためにどのホームで乗って良いのか解らなかったということです。そこで道に迷って、自分が自身にちょっと腹が立ってしまって、ある興奮状態でこの展覧会を見ることになってしまったということを言いたいのですが）となっている京王線に乗って会場へ向かいました。

そして、できる限り、前述の先入観（感情も）を消して鑑賞しました。

最初に出会った作品が、「さむい日ー日のさしこまない黒い土ー（その2）」です（ちなみに、会場に置かれているパンフレットは、どの作品がどの場所に置かれているかを示すレイアウト図が掲載されており、どの作品が会場の壁のどこに配置されているのか、そこに書かれていますが、作品ナンバーと実際の配置場所は違うような気がします。なので、これを書いている時点で、作品名と実際に私が想像している〈あの作品〉とは違っている可能性があります。）。

以下は、私の絵を鑑賞しながらその場で書いたメモです。

・とても暖かい筆のタッチ
・奥が明るい（つまり奥には日が差している）
・タイトルに反逆している
・森の木々が、一本一本が明瞭に描かれている
・どうしてだろうか？
・陽があるからだろう
・さむくはない
・奥行きが感じられ素敵（特に遠距離で見ると）

次に展示されている（入り口からの動線で見てゆくと二番目の作品ですが、入り口に向かって正面に据えられている最初に眼に入ってくる作品です。）作品は、「さむい日ー水辺ー」です。この絵は、展覧会の案内状に掲載されている作品です。誰が、展覧会の案内状にこの絵に選んだのか解り

「さむい日ー水辺ー」

ませんが、金子拓さんの作品の特徴を示している、もしくは代表的な作品、または作者本人が特定の想いを持つ作品と言えると思います。

この絵につての、私のメモです。

・誰が〈さむい〉のだろう
・湖がきれい
・光を使っている
・タッチは暖かい、鋭角ではない、どうして？

この作品は、他の作品、例えば「ちり（犬が番人のように存在している作品）」と共通性があると思いました。それは、人が立っている地表が丸く凸凹に盛り上がって、まるで死人が人の形を失って土になって存在しているような印象を受けます。そのように、「さむい日―水辺―」では、右側には死んで水際に重なり合っている魚がうごめいていますが、左側の草はその魚のようにうごめいていて、形をなくしているというよりも、生まれ変わり、物の変化（へんげ）、死者か生者かわからないという、輪廻のような印象を持ちます。

こんな風に書いてゆくと、キリが無いので、会場で私が書いたメモを載せてゆきます。

「ちり（犬が描かれている）」（上記作品です。）
・犬が番人？
・死人が丸くなっている
「ちり」（上記作品の次に陳列されているもの）
・アメーバ
・ぞうはく（注：自分でも意味不明）
・仕業
・される
・何かモヤモヤ
「ちり」（上記作品の次に陳列されているもの）
・森
・きれい
・白とのコントラスト
・手前の木の明るさ
・「さむい日ー日のさしこまない黒い土ー（その2）」の表現と同じ
「ちり」（ドクターが描かれている）
「ちり」（建物が描かれている）
・北白川小学校（注：私が入学した小学校です。今でも、当時の木造の校舎が残っています。）
・電灯（黄色い窓）がきれい
「ちり」
・（何かが書いてあるけれど、判読不能）
「ちり」（上記作品の次に陳列されているもの）
・キャンバスの地を残す
・自黒
「ちり」
・立体的
・キャンバスの横まで塗られている
「光景―ささやき―」
・木々の
「光景―ささやき―」
・驚く人の人
・思い出
・ランチしている人
・自然の中
「光景―ささやき―」
・ひそひそ話
「さむい日―さやさや―」（２０１２年）
・なにが寒いのか
・心が

・自然が
「さむい日―馬―」
・孤立

「さむい日―馬―」

頭が痛む
孤独とも言えないらしい　頭が痛む
走る人と馬の　頭が痛む
イタイのではない
痛むのだ
そう
心が痛むというふうに

「明るい夜―散歩―」
「明るい夜―散歩―」
・岩
「明るい夜―散歩―」
・足
・草達
「明るい夜―散歩―」
・大木に手を添えて歩く人
（後記：木の存在の安心）

「明るい夜―散歩―」

今、これらのメモを見ながら、私は反芻しています。まず、光の表現にとても惹かれる（気になる）ものがありました。そして、一連の「ちり」という小作品は、忘れ去られる（た）モノを、気配として次々と描いています。「ささやき」という作品にもその気配を感じます。金子拓さんが描いているものは、その気配ではなかと思います。そして、それは光、それも暖かな光です。そういう意味で、私の見終えた感想は、「明るかった」というものです。それは、「希望」という未来への期待を持たせるような安易な明るさでは決してないのですが、例えば、見えないモノを映し出している、そんな明るさです。そういう意味では、希望なのではないでしょ

うか。そこに寓話があるのでしたら、堀元彰氏が書かれているような＜現代の黙示録＞となるのでしょうが、そこは私には解りませんでした。

▼2016.01.30　千田基嗣氏より詩集『湾Ⅲ』拝受。

▼2016.02.07　終日家に閉じこもる。十一月に行った句会の作品による句帳を活版で印刷するための文選の前処理（棚付け）作業。

▼2016.02.11　句帳の組版を始める。

▼2016.02.14　いわきでのフルマラソン。五時間四分（グロスタイム）。この調子なら五時間を切れるかもと、欲が湧く。駒村吉重氏の『山靴の画文ヤ辻まことのこと』（山川出版社）を読み始める。

▼2016.02.20　えずこホールの平戸間で柳屋喜多八の落語。

▼2016.02.22　サンタロット画材店に久しぶりに伺う。BFK の銅版画用紙とマスキングテープを買い求める。

▼2016.02.23　地元にある金属の切削加工工場を訪ねる。テキンのチェースの加工を依頼する。若い方が質素なバラックの小屋で個人経営している。けれど、仕事っぷりが面白い。結局、現物合わせで加工してくれるとのこと。

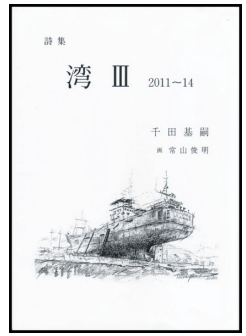
▼2016.03.04　深夜まで句帳の印刷。

▼2016.03.05　詩誌『幻竜』拝受。

▼2016.03.06　夜、読書会の案内状の印刷。

▼2016.03.07　読書会の案内状の投函。洪水企画より『虚の筏』届く。

▼2016.03.08　気仙沼在住の詩人・千田基嗣氏が第四詩集『湾Ⅲ』（発行者：気仙沼自由芸術派　千田基嗣）を上梓しました。千田氏が今回詩集としてこれまで発表してきた詩をまとめたのは、何かの区切りをつけようということよりも、ある程度彼が編集を担当している詩誌『霧笛』に発表したものを中心とした詩群が一つの形を成したということなのだろうと思います。それは、気仙沼の地形をひとまわりなぞったということに近い感覚なのかもしれません。



私はこの詩集を読むに当たって、ちょっと遠回りをしました。この詩集に収められている詩編は、全て東日本大震災の津波被害に遭った気仙沼において震災以降に書かれたものです。そして、その多くの作品を私は私なりの震災の記憶とともに送られてくる詩誌『霧笛』で同時並行的かつ時事的に、それぞれが独立した詩作品として読んできたものです。それが塊となって詩集となると、ただ単なる詩作品の集合体ではなくなるのではないかと思います。それは震災との関連で狭義に読み進めてきたかつての千田氏のそれぞれが独立した作品ではないのではないかと思います。穿った書き方をすれば、一冊の本としての普遍性を見出すことが、私がこの詩集を読むに当たっての目標でした。

そういった回りくどい思考を経て、さらにその上で言葉をただ言葉そのものとして抵抗なく受け入れる。つまり自然体で読むように努めました。そのために、幾度か読み返しました。具体的にそれは東日本大震災との関連性を必要以上に持たないように読むこと。あるいはその逆に意識して震災のことを切り捨てて読むことはしないこと。という揺れ動きをしました。とにかくこの詩集『湾Ⅲ』を、震災という色眼鏡で読まないように努めました。だから、一度、東日本大震災と切り離して、その次に全てを受け入れて、真っ新な気持ちで読む作業を行いました。

端的に書けば、そこで感じたことは、＜混乱＞がある、ということです。海で例えれば、波に＜乱れ＞が形として見えるということです。それもくっきりと、です。それは、取り除こうとしても、容易には取り除けない気もしますし、簡単に取り除くこともできそうな気がします。用意周到な視線を持つ千田氏ですので、千田氏の取った態度は後者、つまり（簡単に取り除けるのだが）あえて取り除かなかったということではないかと思いました。

千田氏のブログを読まれたことのある方はご存じのことと思います。千田氏は、自己紹介の短い文章において、リベラリストと自分を語っています。あえて外国語の読みを使っています。日本語の一般的な訳となる「自由主義者」という表記となりますが、それだけでは表せない生き方を目指しているとも読み取れます。私が思うことは「リベラリスト」という言葉

は。日本においては処世術ではないかということです。

詩は処世術ではない、と断言できます。いや、断言したいという気持ちが私にはあります。世間的には、そのどちらでも良いのですが、千田氏にとって詩とは何か。そんなことは答えの出ないことなのだと思いますが、千田氏が＜混乱＞をあえて書き残したことは、つまりはリベラリストだからできた処世術ではないかと私は考えるのです。ですから、千田氏の核心はそこにはないということです。

では、何のための処世術なのか。そして、核心とは何か。と、なるのですが、他人ではそれは容易には想像できないものであるし、容易に想像できる何でもないこと、と言い切ることで、私の詮索は終わりにしたいと思います。

それで、肝心の作品についてです。私が読んでいて気づいたことは、初出では、一旦、消えかかった千田氏の＜視線＞がこの詩集では戻っているということです。これは、字面で確認したことではありません。ただ単に読んだ印象として感じたことです。しかし、私自身の感覚としては、その違いは確信ができることです。もしかして、その確信できるものとは、私の自身の変化であるのかもしれません。

千田氏の＜視線＞とは、私なりに理解すれば、「何ごとにもとらわれない客観的なものの見方」ということになります。そして千田氏の詩の特徴は、まさにそこにあると私は思っています。千田氏の＜視線＞が消えているということは、＜自分＞が世の中の事象に埋没していると言ってもよい状態です。つまり、自分が何者かわからないにしても、実社会において自分というものが自分で見えていない状態です。それが、私が感じた千田氏の場合の＜混乱＞ということになります。そういう状態では、人は世の中の風潮に得てして流されている場合があるということです。先ほど，私は千田氏の＜視線＞が戻ってきていると書きましたが、それでもやはり、初読で感じた＜混乱＞がまったく消えたわけではありません。ですから、千田氏はあえて世の中の風潮に流されている状態をこの詩集に残したと言えます。

このように書き進めてゆくと、ひとつひとつの詩をどうのこうのと引用して書き記すことがあまりにも無駄な気がしてきました。この詩集に書かれている言葉の一つひとつがどういう意味を持っているのか、この詩集がなぜ編まれ、どうして世に出され、何を言いたいのかということ、それは、結局は一つの問いに収斂してゆくと思えてならないからです。その問いとは、「どうして＜混乱＞を書き残したのか」ということです。

例えば、この詩「男たちは酒を飲み」は、

男たちは酒を飲み談笑する
冗談を語って笑う
薪ストーブの火は柔らかく暖かい
昼間のこと昨日のこと十年前のこと
そしてつい半月前の海のこと

男たちは酒を飲み談笑する
ベニア板の屋根の下
ブルーシートの壁の中

外は冷たい夜
泣くものはひとりもいない

詩「男たちは酒を飲み」全文

ここでは、一つの状況を提示して、次に反対な状況を提示するという書き方をしています。この引用した詩では、「談笑する」、「笑う」といった微笑ましい人間の姿が描かれているのですが、それが一転して最終の連では「冷たく」、「泣くものはいない」と逆の視点で状況が表現されています。どちらの言葉も裏表の関係で同じことを語っていると思います。

次のページに並べられている「白い雲」も同様です。

窓の外に青い空

よく晴れて白い雲が浮かんでいる

昨日は曇り空だった
どんよりと雨が降り出しそうな
一昨日は雨だった
全天を覆う鼠色の雲
その前の日は
晴れ
特筆すべき特徴のない晴れの日
ありふれた
凡庸な晴れの日
おおかたが雲に覆われ半分に満たない青空

（中略）

今日は
晴れ
特筆すべき晴れ
輝くような白い雲のぽっかり浮いた
特別の晴れ
快晴
絵本に出てきそうな典型的な白い雲が
十個ほど浮かんでいる
昨日とも一昨日とも違う特別な晴天

詩「白い雲」一連，二連，四連

「ありふれた／凡庸な晴れの日」と状況を一旦提示しておきながら、次に「今日は／晴れ／特筆すべき晴れ」と逆側のものの見方で連を繋いでゆきます。

次の「涙が頬を」でも，

地球は
軟式テニスのゴムボールのゴムなんかより
ずっとずっと滑らかだそうだ

深い海も
高い山も
地球の大きさに比べたら
モノの数ではない

（中略）

でも
人間にとって
深い海は深く
高い山は高く
涙は
冷たく
暖かい

詩「涙が頬を」最初の二連と最後の一連

この詩でも、宇宙という大きな視点での見方と、宇宙に比べれば人間という米粒よりも小さな視点での見方、二つの違う見方で連を繋いでゆきます。

この書き方は、何ものにもとらわれないという、千田氏の詩の特徴の一つです。肯定的自由と否定的自由の並立ということなのかもしれませんが、これ以上、哲学的なことを語る知識は私にはないので、この点については さらりと通り抜けたいと思います。この他にも、この詩集に収められた多

くの詩の中にこの特徴が表れます。この表現は、私が感じた〈混乱〉ではありません。初読では、この表現自体が〈混乱〉であるとも感じたのですが、どうも以前の作品に比べて目立って多いという点以外は、あまり変わっていないと思うようになりました。

では、私が感じた〈混乱〉とは何かということです。それは、例えば、詩「闇の中で」を引用します。

漆黒の闇の中で動いているものがある
見えない
見えないが動いている巨大な塊り
滴り落ちる水滴
聞こえない
聞こえないが落ちている

（中略）

見えもせず
聞こえもせず
触ることもできず
冷たいのか熱いのかどちらでもないのか
感知することができない
満腹なのか空腹なのか疲れているのか
何も分からない
何も分からないのに
そこに何かある
そして私がいる

私は何を語ろうとしているのか
何を語るためにここにいるのか

詩「闇の中」最初の二連と最後の二連

この詩は、前に引用した三篇の詩とはちょっと違っています。「冷たいのか熱いのかどちらでもないのか／感知することができない」、「満腹なのか空腹なのか疲れているのか／何も分からない」と物事を両義性で語ることを放棄しているように感じます。千田氏の〈視線〉が消えているような印象を持ちます。

続いて，詩「ありがとう」を引用します。

今
ここで
息をしていることに
今
ここで
水を飲んでいることに
今
ここで
食べていることに
今
ここで
陽を浴びていることに

（中略）

今
ここで
あなたといることに
あなたの声を聴いていることに
あなたに語りかけていることに

あなたがいることに
あなたを抱いていることに
あなたがここにいることに

海が
波立つことに
ありがとう

詩「ありがとう」最初と最後

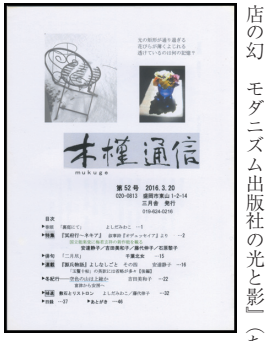
この詩は、とても穏やかな作品です。いや、敢えて書けば、あまりにも穏やかすぎるのです。海に例えれば、凪の状態です。この詩集の構成はよく考えられていると思います。穏やかな凪の状態から始まって、次に嵐がやってきて時化となり、最後にまた凪の状態に戻るというフェードイン、フェードアウトで見事に作られています。凪の状態の詩は、千田氏の〈視線〉が自然に同化している（しまっている）のではないかと思います。ですから、祈りのように心が安らぐとても美しい詩です。そういう詩が、数多くこの詩集には収められています。私は、そんな詩がとても好きです。そして、だからこそ〈混乱〉をこの詩集に私が感じたのではないかと思います。〈混乱〉とは、正体がないのです。

千田氏がどうして、敢えて〈混乱〉を書き残したのか。その答えは読者に委ねられています。私も一人の読者として答えを探したくなるのですが、容易には見つからないような気がしています。

最後に、〈混乱〉がはっきりとした形として見えるということは、千田氏のこの詩集の中に普遍的なもの（千田氏の言葉で言えば「美しいもの（前出の「美しい詩」とは違います。）」につながるものがあるからこそではないかと思うのです。

▼2016.03.11　義父の歌集のことを考え始める。

▼2016.03.12　読書会。ゲストは歌人の斉藤梢さん。きちんと「詩」というものを捉えて整理されている。その言葉に力強さを感じる。歌人。高岡恵を知る。この日から、お世話になっている方から借りた内堀弘『ボン書店の幻　モダニズム出版社の光と影』（ちくま文庫）を読み始める。



▼2016.03.13　義父の歌集は、拾遺から出すことを決める。

▼2016.03.17　盛岡のギャラリー・シグの ZINE 展に出す Art-ZINE のための銅版画の印刷を始める。

▼2016.03.19　吉田美和子さんから『木槿通信』二冊拝受。

▼2016.03.20　瀬崎氏の詩を読むと、いつも不思議な感覚に陥ります。何かが掴めそうで、掴めない。目の前に確かにあるのに、意識を切り替えて、その実体を自分なりに明らかにしようとすると、消えて無くなる。そんなもどかしい気持ちにさせられます。それは、瀬崎氏が、感覚で書いていないからだと思います。自分の作品を作品たらしめるための、もう一人の自分が、自分を見ている風景を常に持っているからだと思います。

平成二十八年冬刊の個人誌『風都市』第三十号の作品も、まさにこの不思議な魅力を持った作品です。例えば、詩「雨を忘れる」も、やはり私の拙い言葉ではとうてい言い表せられない魅力を湛えた作品です。

鯨の親子が泣いている絵を
幼子が描いている
大きな丸と　小さな丸であらわされた鯨は
幼子のなかで

なぜ　泣いたのだろう

降りはじめた雨のなかを
ふたりの中学生が傘をささないままに
横断歩道をわたっていく

彼らが向かう方角には
雨は見えていないのだろう

詩「雨を忘れる」前半の第二連と第三連目の最初の二行

この詩の冒頭の一連を読むと、子どもが描く鯨の絵が浮かんできます。大きな丸と小さな丸、親は大きくて、子どもは小さいくて。その単純明快さは、とても微笑ましいです。しかし、どうして鯨の親子が泣いていることが、ただの二つの丸から想像できるのか。ここで私は混乱します。この混乱は、意味がわからないからということではなく、最初から断定されているだけに納得させられた上で、さらに不思議に思うのです。

だから、どこかに手がかりを求めたくなります。ここからは勝手な読みです。鯨が空を漂っているとします。空で泣いている大きな哺乳動物の涙は、雨のように大量に地上に降り注ぎます。雨は、鯨が泣いているから降るのです、と仮定します。

すると、その雨が見えない中学生は、鯨は海の動物だと知っているから、幼子の中で泣いている雨を見ることはできません。

それに続く、第四連を引用させていただきます。

それでも
わたしが帰る家は
雨の向こうにある

詩「雨を忘れる」第四連

この連での「雨」は、空から降っている泣いている鯨の雨です。ですから、当然に「帰る家」は、現実の家、つまり自宅ではありません。丸い鯨が泳いでいる、鯨の涙が空から降ってくる、そんな世界にある「帰る家」です。幻想の世界でしょうか。それは、作者がそこに辿り着きたいと思っている想像の世界と言ってもよいのかもしれません。素直に考えると、何色にも染まっていない、可能性が沢山ある、無垢な、子どものような感性が働く、純粋な世界かもしれません。世間慣れし、物知り顔になった大人では、とうてい辿り着けない世界ですが、それでも帰りたいのです。

結局、ほとんど作品の全文を引用することになってしまいますが、最後の二連を引用させていただきます。

車のワイパーが
思い出したようにときおり雨を拭う

忘れられているわけではないのだな

詩「雨を忘れる」最後の二連

ここでの「雨」は、現実の雨です。しかし、確かに鯨の涙の雨です。日常の何気ない出来事が、急に意味を持つことがあります。その瞬間は、その人、その時にしか解らないことです。だから、大きな出来事でない限り、なかなか人には伝わりません。伝えることが困難です。でも、感じた人にとっては、確実に行動の動機となるものです。

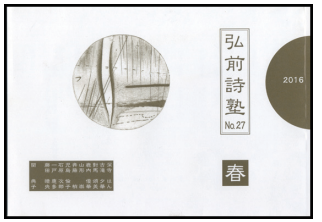
最後の連の主語は、鯨の涙の「雨」です。そして、そこにもう一人の作者が現れます。この一行を書くことで作者はこの文章を詩として成立させていると言ってもよいのかもしれません。なぜならば、例えば「死を忘れる」という言葉があったとします。誰にでも起きる出来事を人は忘れてしまって生きることはできません。だから、どんな人でもどこかで死と向き合うことになります。それだからこそ、限られた人生が豊かになるという

ことがあると思います。

単純なことを書けば、雨が降ることで、植物が育ちます。そして、水が循環します。それは、生きているということです。人は、死にたくない。死を忘れたい、けれど必ず死と直面するときがやってきます。と、考えることができます。

以上、無理矢理私の言葉で、例えばということで、この詩の魅力を書いてみましたが、どうも書き切れていません。瀬崎氏の詩は、読む人にとって、まったく違う印象、そして理解を残すのではないかと思います。それは、まさに言葉が心に感覚として届いた、つまり読み手の中で詩が成立しているということではないかと思います。まさにその現象が詩ではないかと考えるのです。

▼2016.03.21　刷った銅版画に活版で文字を印刷。



▼2016.04.07　斉藤梢さんより詩誌『弘前詩塾』No.27を拝受。青野江里さんから詩誌『PO』第一五八号拝受。

▼2016.04.09　県民会館でボブ・デイランを聴く。ステッカーを買い求める。嬉し。

▼2016.04.13　床に落とし壊れた野切りの溶接をお願いしていた相馬の会社から、修理が終わったとして戻ってくる。大事に使っている古い道具につき、お代はいらないから、これからも大事に使って欲しいとのこと。感謝。

▼2016.04.15　マルの誕生日。マルと家族で外泊。

▼2016.04.23　いわきのマラソンで痛めた足の回復状況が思わしくないので、柴田さくらマラソンは出場を断念する。父の一周忌の法要の案内状のための文選作業。

▼2016.04.24　父の一周忌法要の案内状を組版し、印刷まで一気に終える。

▼2016.04.29　喫茶ホルンのショップカードを作るための亜鉛版届く。メタルベースに貼り、印刷開始、夜に完成。

▼2016.05.04　急遽、ジャズフェス出場のため、息子とスタジオで演奏を録画。

▼2016.05.13　ショップカードのリベンジ。印刷終了。

▼2016.05.14　夜、NHK—FMでサティの生誕一五〇年記念番組を聴く。面白かった。ドビッシーが編曲したジムノペディが思いの外良かった。

▼2016.05.16　辻まこと、辻潤の文章を意図的に、この頃読む。

▼2016.05.21　盛岡。喫茶店「六月の鹿」は居心地が良かった。

▼2016.05.22　綿毛が飛ぶ。岩手県立美術館でモランディ展の企画ワークショップに参加。モランデイの真似をするワークショップ、終日。モランデイはタッチがどうのこうのと言うよりも、一つひとつのタッチで色が微妙に変化する。その感覚をちょっと味わう。それと、空間の感覚を辺りとの関係で考えるところが面白い。展示担当の学芸員の話を聞けて良かった。結局、未来派の動きなどがあった中、モランディは芸術の革新運動的なものに染まらず、自分を変えなかったこと。それは物事を見る作業としては、超個人的なこと、それが共感を呼ぶとはどういうことなのか。

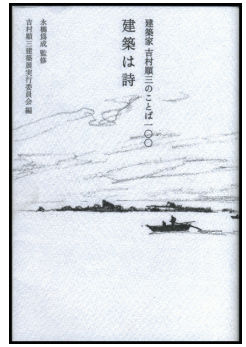
▼2016.06.17　散骨。

▼2016.06.23　津島祐子『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』を読み続けている。

▼2016.07.03　二本松の東和でハーフマラソン。

▼2016.08.12　義父の歌集完成。印刷した和紙を麻の葉綴じで装丁。十三回忌の供養になれば嬉し。

▼2016.09.21　東京。建築の専門店 Nanyodo Book Shop が面白い。永橋爲成監修、吉村順三建築展実行委委員会編『建築は詩　建築家吉村順三のことば一〇〇』（彰国社）を買う。



▼2016.07.23　読書会。ゲストは文筆家の駒村吉重氏。終わった後の酒宴でマスメディアではないミドルメディアとしての同人誌の存在意義を駒村氏が語る。詩誌『回生』の発行に疑問を感じていた自分にとっては、ちょっと意外（自分の反応が）。詩が多くの人に支持されることは、良いことばかりではない。

▼2016.09.24　植字台自作する。

▼2016.10.01　恵比寿で中川ワニ氏の珈琲教室。帰り、駅前のアンティークショップ mumu でレタープレスのスタンプ一個購入。

▼2016.10.05　気仙沼で開催する竹林嘉子版画展のチラシを作成、印刷所に入稿する。

▼2016.10.09　角田の田園ホールで生活向上委員会２０１６のコンサート。ドン・モイエだけが自由だった。

▼2016.10.15　最近、詩が読めない。詩集がたまに送られてきても、最初の二、三行で読もうとする気持ちが失せてしまう。どうしてだろうかと、ずっと考えていた。困っているわけではないので、放っておいたが。

今日、その理由が分かったような気がした。それは、詩は、何かと何かの関係ばかりを書いているからだ。もっと、正確に書けば、そういう風に私が詩といわれるものを読もうとしてしまうからだ。

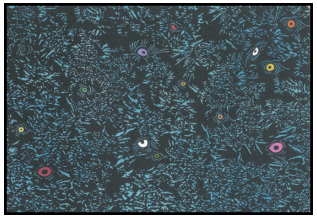
言葉と言葉の空白を埋めようと自分の意識は自然と動き出す。分からない言葉や、単語としては知っているけれど、文章としては理解できない言葉に出くわす。すると、特に後者の場合はやっかいだ。なにかにと自分の経験に引き寄せ、読み解こうとする。それで、自分なりに読んだ気になる。それがとても無駄な努力に感じる。自分には、そういう読み解こうとする感覚が、どうも染みついてしまっている。じゃあ、そんな無理に読むんじゃなくて、感じるか感じないかだよ、と開き直ってもさっぱり感じない。

詩の言葉は、意識して読むものではない。なんとなく、口ずさみたくなるとか、（読んでいて）ふわっと感覚が湧いてくるとか。そんなものだと思った。だから、周りのいろんなことにアンテナを立てて、言葉を感じよう、理解しようと躍起になればなるほど疲れるばかりだ。

そんなことを思ったのは、最近、ふと湧いてくる言葉に出会ったからだ。ただし、詩の中の言葉ではなく、その詩が収められている詩集の表題の言葉だ。それは、「片耳の、芒」（瀬崎祐　詩集『片耳の、芒』（思潮社、2016年10月刊）。

この言葉に出会っただけで、私は十分だ。この詩集に収められている詩の幾篇かは、瀬崎氏の出している個人誌『風都市』で読んでいる。今回の詩集を発行するに当たって、初出の言葉を見直したものはないようだが（私は、詩「揺れる」だけしか見ていない）、詩集に掲載するにあたって、丁寧に作者の中で文章が整えられている。具体的に言えば、空白の行が加わっている。余韻というか、区切りというか、言葉を一つの文字列で終えさせようとする意志が伝わってくる。最初に書いた、関係性を見事に断ち切った仕様になっていると感じた。それが「片耳の、芒」という言葉にも通じるような気がする。

▼2016.10.19　村上かつみさんの『村上かつみイラスト展　続・黄色い雨が降りそそぐ』を丸善ギャラリーで見る。



前回の尾形亀之助の詩にインスピレーションを得て描いたイラストに比べ、明らかに説明が消えている。村上さんか、亀之助か、判別できないような世界がそこにあって楽しかった。ご本人の言葉として、あまり好評ではなかったようですが、それが尾形亀之助なのだと思う。

▼2016.11.04　竹林嘉子さんの版画に添える言葉を印刷するための作業。棚付け、文選まで終了。印刷は明日。

▼2016.11.05　読書会、ゲストは阿部宏慈氏。詩を語るときの阿部氏の、涙が込み上げてくるような潤んだ目が印象的。久しぶりに純粋なものを見た気分。竹林さんの版画への言葉の印刷はできず。

▼2016.11.06　個人誌の印刷を早朝に終える。

▼2016.11.08　ファイルメーカーで活字のデータベースを作る作業を本格的に開始。

▼2016.12.02　山茶花忌。所要を済ませ、妻を病院へ、その間、また所要。通信、詩誌『百葉』、句誌『荒星』届く、『百葉』の冒頭の詩はいいなぁ～。結局、妻は治療をせず。その後、昼食を食べ、仙台で所要を済ます。喫茶ホルンに個人誌をまた置いてもらう。古いのは回収。県美のモーツアルトでスフレと珈琲。

▼2016.12.03　句帳の文選。臘八摂心（ろうはつせっしん）に行く。夕方、赤羽に行き、息子に会う。母方伯父の通夜と告別式参列のため。

とても質素ですが、芸術の香りの溢れる素敵な空間です。定禅寺通りに面するビルの奥にひっそりとお店はありますので、静かな時間を過ごすのに最適な喫茶店です。

喫茶ホルン

仙台市青葉区立町の喫茶ホルンです。フレンチプレスで抽出するスペシャルティ珈琲や南インドカレーなどをお出ししています。

営業時間 火曜～日曜11:00～19:00
（月曜定休）

所在地　〒980-0822
宮城県仙台市青葉区立町26-17-202
（定禅寺通り・せんだいメディアテーク向かいの甘栗屋さんの2Fです）

電話 022-711-5520
Twitter：@kissahorn
URL：http://kissahorn.blogspot.com/

！！！ランチプレートを始めました！！！
お昼の午後12時～午後２時は南インドカレーのランチプレートもあります。ドリンクも１５０～２００円プラスでオーダーできるお得なサービスです。

一番星

青島江里

毎日同じ出来事が続くと
歩き慣れたこの道も
遠くに感じることがあります

短くてまっすぐな
バスの停車場までの距離

空に煙る朝日と夕日を
行ったり来たりしているうちに

それは螺旋階段のように
トットトットとカンカンと
今にもねじれて
消えてしまいそうになるのです

だからひと恋しくなる日は
わざと遠回りして
新しい道を探そうとします

このままねじれてしまったら
元のさやまで
帰れなくなりそうな気がするのです

誰ひとり
知っているひとなんていないのに
よく似た姿が何人も道をよぎります

横断歩道を寸断する信号の赤は
向こう側の夕日よりも
あたりまえのように近くて

もうすぐ昇り出す三日月の影を
点々と霞めて
渡る夜空を広げてゆきます

本屋に立ち止まるひとの影も
コンビニでしゃがむひとの影も
よく似ているけれど
いつも違うひとの姿です

行ったり来たりの日々の道が
どこまでも続きます

帰りたいのに帰れない夜は
通り過ぎる足音だけが頼りです

見失うものが
どこかへ連れてゆこうとする
ねじれた坂道の遠くに

目の覚めるような
一番星が光っていました

わたしが棄てた女

前澤ひとみ

病弱だった姉は看護婦さんになって帰ってきた
腰まであった長い髪もバッサリ切った
落とされた黒髪は供物のように白い紙に包まれて
「棄ててしまってもよかったんだけど。」
と、わざとぞんざいに
父に手渡された
父はそっと床に置き、そっと開いた
怨念の固まりのようで、わたしはギョッとした
感慨深げに父は「大切にしまっておこう。」と言った
姉が小学生だった頃まで、長い髪の束は
父が丁寧に梳かして、三つ編みのおさげに仕上げていった
姉が座ると父がやって来て、静まりかえった居間でキシキシと
結われていった
「お待たせ。」と姉は、白い歯を見せて笑った
花が咲いたようだった
けれども、しばしば
学校から帰ると、青白い顔をしてじっと横たわっていた
姉は「ごめんね。」といつも謝った
何故謝まるのか、分らなかった
その事を言うと「ごめんね。」とまた謝って

力なく笑みを作った

はたちになった姉は看護婦さんになって帰ってきた
しばしばもらうラブレターは、時々ぞんざいに
五つ下の妹に手渡されていった
要するに、全くもって恋は盲目であった
そういう人じゃないのに、そういう人だと言う
ここに描かれているその通りの人がこの世界のどこに存在するのか
早々に屈折して辛辣な事を述べる妹の言葉を
姉はただニコニコと聞いた
ある日
明日をも知れぬ重い病の少年の長い告白を読んだ
少年は姉のなかに生の証を激しく求めていた
わたしは目まぐるしく考えた
この少年がこのまま苦しみのまま死んでいって良いはずがなかった
わたしは言った
「嘘を付いてでもこの人の想いを叶えてあげればいい。」
すると姉は目を見開いた
しばらくの沈黙があった
そして「そんなことができるはずがない。」と声を荒げた
「わたしならできる、嘘をついてでもやる。」
わたしは泣きながら言った

姉の本棚に、遠藤周作の書物があった

首の痛みについて

小熊昭広

朝に
目が覚めたら
そこに、奈良のダイブツがいたのです
私が眠っている間に、やって来たらしいのです
それから毎日
ベッドから這い出して
机の上に置いた掌（てのひら）にさわって
語りかけてくるのです

話の中味は
リンネとか
フダラクトカイとか
ちょっとなじめない、どうでもいいようなことです
興味はあるのですけれど
首をかしげるものもありまして

平気で無視をすることもありました

すると彼女は
私のベッドに行って
シーツの上で
雲が浮いた空を描くのです
まるで、闇の中で失禁しているように
だから
濡れたままの靴を履いて私は
会社に向かいます

別れてしまったのに
ダイブツは箒（ほうき）を持って、追いかけてきます
たまに踏切で遮断機が降りるてくると
捕まった腕に
包帯を巻いた痛みが走ります
時には、そのまま赤い電車に揺すられて
思わず私は、隣の人に縋（すがり）つき
むしり取ってしまいます

午前の点検で
様子を見ていたカラダは
鏡に映った自分の姿を見て
かたちが輪郭線で描かれていることに
とても満足していました
よく見ると、それは
破線になっているのですが
骨格をきれいに浮き立たせているのです

けれど
正しく歪みがないとは
言い切る自信はありません
やはり、ダイブツが箒を持って近づいて来るのです
カラダはどこかへ消えてしまい
自分を支える術を知らないものですから
私は西の方に身体を向けて
カミソリで彼の遺伝子をサクッと切りました

すっきりしたのですが
ここからがジョウドの始まりなのでして

レイコンも、そしてご先祖様も拠り所を失ったはずなのに
白い鳥が寄ってきて
ひらいた羽根をゆっくりと上下に揺するのです
波紋が水面を通り
鏡の代わりに使っていたガラス窓に
紐のようなヒビが入ります

昼休み
稲荷弁当を
一つ開いて両手に箸を持ち
コリコリと食べました
時々、前屈みになると首が窮屈になるので
後ろにそらすと、今度は息が吸えなくなります
ダイブツが念仏を唱え始めました
止めてくれとお願いしました

●寄稿者住所

やまうちあつし　宮城県名取市増田一丁目13-18-10
秋網まさお　宮城県仙台市青葉区葉山町3-5-201
金子忠政　宮城県白石市福岡長袋字永坂15の1
青島江里
前澤ひとみ　宮城県富谷市（在住）

ランダム・メモリー

■人の尻から卵が生まれることはないにしても、何か違ったモノがでてきて欲しいと思ったからといって、叱られることはないでしょう。実際、変なモノが出てきたら、黙っていれば良いのですから。

■やっと詩誌『回生』を発行することができました。＜異物＞ではないところが気にくわないのですが、身についたものを取り除くのは容易ではありませんし、そんな気力もありません。

■今号も、やまうちさん、金子さん、秋網さん、青島さん、前澤さんに寄稿をお願いしました。快くお引き受けいただき、感謝申し上げます。特に、青島さんには一年以上も前に原稿をいただいておりました。掲載の約束を果たせてほっとしています。また、前澤さんには、今回は書けないといわれたのですが、紙面が余ったので無理に書いていただきました。頂戴した原稿は、予定の行数を超えていたので、勝手にフォントの大きさを小さくさせていただきました。

■やたら長くて字が小さい情報短信を読んでいただくと分かるのですが、このところ活版印刷で、はがきとか名刺とか一枚物の案内状とか、軽い物を印刷する機会が増えてきました。組版は感覚で印刷工が行っているものとばかり思っていましたが、そうではなくコンマ何ミリの世界できちんと計算して版を作り上げていることを知りました。その上で最後は人の感覚で綺麗な印字ができるように調整します。何事も基礎があって、その上に応用や人の感性が加わり、お客さんに認められる物ができるのだろうと思いました。

■現代詩の世界は、これといった基礎はないように思います。あったとしても、その人だけのものか、借りものです。先人が残している言葉の上に成り立っているようにも思えますが、重い荷物のように背負って立つ必要もないし、歩く必要もないのだと思います。時々、走っている人を見かけますが、手荷物を持っている人は大変です。応用や感覚が大切な世界なのでしょうか。

■活版印刷も所詮、文章を大量に複製するための技術です。手間暇が掛かるということは、文字を読む側にとってはどうでも良いことです。今は、パソコンがあれば、多くの人が安価でフルカラーの綺麗な本を簡単に作ることができます。

■私にとっての活版印刷の魅力は、書き手として、自動処理の部分が少ないということです。言葉とは関係のない部分で自分が考えて動かないとできません。そうこうしているうちに、誰に対してこんなことをしているのか考えます。

■今号も表紙画は明才さんにお願いしました。感謝申し上げます。（熊）

詩誌「回生」第き号（通巻第三十九号）

発行　二〇一七年二月二十日
編集　小熊昭広
表紙画　明才
発行者

中村正秋（なかむら・まさあき）
〒371-0103 群馬県前橋市富士見町小暮
2225-15　tel　0272-88-9073
gcom@garagecom.jp
小熊昭広（こぐま・あきひろ）
〒989-1201 宮城県柴田郡大河原町大
谷字原前 50-5　tel　090-5230
-2349
kaisei@poetic.jp
Twitter　@shishikaisei

発行所　快晴出版

定価　フリー（時価）